盛岡赤十字病院紀要　Vol. 29，No. 1，35－37，2020

技術・実践

救護員としての赤十字看護研修を効果的に実施するために　― 災害看護Ⅰ―

盛岡赤十字病院　教育研修推進室
阿部　幸子

はじめに

東日本大震災以降，災害救護活動は多様化し，複数の他団体との協働や期間の長期化等，救護員も戸惑い力不足を感じる事があった。救護員育成の担当者としては，経験の有無に拘らず，「災害サイクルに応じ柔軟で自律した活動ができる」救護員の育成が必要と考えた。背景として，赤十字看護系教育機関既卒者の減少もあった。そこで，29年度と30年度の災害看護Ⅰの研修にワークを取り入れたところ，「活動のイメージ化ができ，自らの活動を考える」ようになると分かったので報告する。

Ⅰ．方　　法

※ 参考
救護員としての赤十字看護師研修概要
研修対象：実践者ラダーレベルⅠ・Ⅱの者
単元「災害看護Ⅰ」到達目標：
災害の定義種類原因を学び，その影響（人々の生活・心理）を事例を通して理解を深める。災害時の医療活動の特殊性や目的，看護師に期待される役割等について考える。
学習方法：講義・演習・文献やビデオによる自己学習
参考文献：災害看護学・救護員マニュアル・赤十字科目
評価方法： 課題レポート

1．A病院の2017･2018年度「災害看護Ⅰ研修」に

①災害活動報告　②トリアージ訓練　③情報収集の実践　④A病院の安否確認システム登録　⑤傾聴体験　⑥「HUG」（避難所マップ）⑦GW「派遣命令が出たら準備する物・事」等，多くのワークを取り入れた。

2．「災害看護Ⅰ 研修」受講者の課題レポートに

講義を受ける前後の意識変化を記述してもらい，意味のある内容に分け，類似のものをコード化した。

3．課題レポートと受講者アンケート

課題レポート1 災害時，看護師に期待される役割	①講義を受ける前はどのように考えていたか ②講義を受けた後に変化があったか ③そして今あなたが考える看護師に期待される役割とは
課題レポート2 (東日本大震災以降の災害を資料として記し)救護員として派遣されたら…	①想定する災害の種類・発災時期 ②救護員として現地で何を大事に活動するか？
受講者アンケート	①年齢・性別　②看護師経験年数　③A病院経験年数　④被災経験の有無（ある方は，時期・災害名・被害内容）⑤過去の派遣経験（ある方は，時期・災害名・感じた事）⑥過去に職場の同僚・先輩が派遣された事があるか（ある方は，時期・災害名・その際感じた事）⑦研修を受けて（良かった・工夫してほしい事・良くなかった）⑧研修を受けて災害看護について気持ちの変化はあったか

Ⅱ．倫理的配慮

本研究は，A病院倫理委員会の承認を得て実施した。

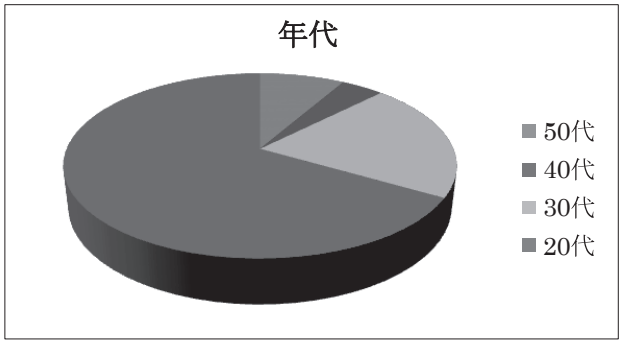
Ⅲ．結果・考察

「災害時，看護師に期待される役割」について，講義を受ける前の実感として，「急性期のイメージ」「不安」「怖い」が多かった。また，災害派遣自体，「自分からかけ離れたもの」「（自分以外）経験豊富な限られた人が行くもの」という捉え方もあった。が，同じ受講者が，講義を受けた後の変化として，「発災サイクルに応じた」「ニーズは変化する」「コミュニケーションが大事」「柔軟性を持って」と記述し，受講後に活動のイメージ化ができるようになっていた事が分かる。また，「講義を受けた今，考える災害時の看護師の役割とは」という問いには，「支援が必要な人と多職種を結ぶ」「生活環境整備」「感染対策」「こころのケア」「妊産褥婦ケア」等，多様な活動の方向性を示してきた。妊産褥婦ケアについては，災害救護活動報告の中で，災害弱者として妊産婦に触れていた事と，受講者の中に助産師が多かった事も影響していると考える。更に，机上シュミレーションとして，各自災害想定をした上で，「救護員として現地で何を大事に活動するか」というテーマには，被災者に寄り添う姿勢がうかがわれた。講義に実際の救護活動報告やワークを活用することで，遠かった存在の災害救護がイメージ化でき，自身が派遣された場合に置き換えて，柔軟で自律した活動を考える力が育つ事が分かった。

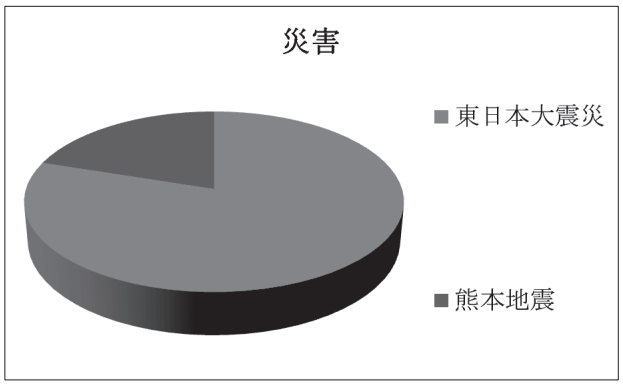
ま と め

講義に，実際の活動報告やワークを活用する事で
・経験の有無に拘らず派遣された状況がイメージできる
・柔軟で自律した活動を自分で考える力が育まれる

1．受講者背景（受講後アンケートから）※助産師が29％



2．過去に職場の同僚・先輩が派遣された事は



（本論文の要旨は令和元年10月18日　第55回日本赤十字社医学会総会で発表した）

利益相反：本論文すべての著者は，開示すべき利益相反はない。

3．受講後の意識変化（ 課題レポートから）

・災害時，看護師に期待される役割

講義前はどのように考えていたか	講義を受けて変化はあったか	今考える看護師に期待される役割とは
・被災地で自分が看護師として活動するのはずっと先の話だろう。 ・急性期のイメージ。 ・長期的な支援についてイメージ沸かなかった。 ・被災地で自分が活動できるか不安，怖い。 ・難しそう。行くのは経験のある特別の人だと思っていた。 ・マニュアルがあり，医師の指示で動く。 ・自分とかけ離れたもの。	・災害各期で求められる看護も変化すると知った。 ・災害時の看護は幅広い。 ・日常業務でも災害時に繋がるものがある。 ・チーム内のコミュニケーションを重視し調整する役割がある。 ・被災地に行く前の準備の必要性。体調管理。 ・少しでも力になりたい。 ・傾聴が大事。自分も少しできるかなと思った。 ・送り出した側も支援者。	・関わりの中で支援が必要な人と多職種を結ぶ。また，職種間を繋ぐ。 ・被災者に寄り添う看護。 ・被災地のニーズにあった看護。 ・妊産褥婦，新生児に心を配る。 ・生活環境，感染対策，こころのケア，病院支援等，広く柔軟に看護する。 ・災害時でもその人らしい生活が少しでもできるよう関わる。